

をわたしたりければと云々、

〔梅花無盡藏上〕江上春望 道灌招福鹿兩山諸尊宿并少年、浮晝船數艘於隅田河、詩歌鼓吹一時

壯觀、

十里行舟浪自花、春遊不覺在天涯、隅田鷗亦應都鳥、鼓吹晚來聲入霞、○中

道灌公爲攻下總之千葉、構長橋三條、其所號橋場、

〔視聽草 五集 六〕埋木の記○中 考證

弘賢按、鎌倉大艸子ニヨルニ、千葉ヲ攻シハ文明十年事ナリ、長橋三條ノ三ノ字疑ハシ、

〔江戸名所圖會 十七〕橋場 今神明宮の邊より南の方今戸を限り橋場と稱す、舊名は石濱なり、○中

按ニ、中略、橋場の號をそらくは道灌下總の千葉家を攻る頃より發るならん、南向亭云く、隅田川の渡場より一町ばかり川上に、むかしの橋の古杭水底にのこりて、舟筏のゆき、にさはり侍るよし、されど其橋の通り、其壱跡なるべき歟、また里老傳へいふ、此の地法源寺大門の通りをよび、今上、神明宮の大門口の通り、其壱跡なるべき歟、また里老傳へいふ、此の地法源寺大門の通りをよび、今共のわたし場より南の方、監船所にあたり、共にむかしの橋場の壱跡なりといへり、然る時は三所共に橋をかくるに似たり、これによつて考ふれば、梅花無盡藏に所謂長橋三條を構ふとある意ならん、

〔南向茶話〕此所に橋あり候故に、橋場と號しけると云、○中 今の隅田川の渡舟ある所より川上一

町程に、古の橋杭残り、折節往來の船筏にかゝり候由なり、神明社あり、石濱神明といふ、古來の名

は石濱といふ、

〔江戸砂子 六〕七橋の跡 昔此邊の大河田川○隅に七橋あり、里民の云、往古武藏、下總の内に大將七人

あり、面々に橋をわたして往還すとなり、所々の水底に其橋杭の名殘今にありと云、橋場の古名もこれによれるにや、

〔視聽草 五集 六〕埋木の記○中 考證

土人の口碑云、三百年ばかりさきに、農家豪富なる者、私に土橋をかけて往來せし事あり、